博物館実習の記録(1980年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教職課程 公開日: 2012-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 公裕, 矢島, 国雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12921

博物館実習の記録（1980年度）

倉　田　公　裕
矢　島　国　雄

本年の博物館実習は受講生137名（うち女子52名）である。博物館実習は博物館学及び教育原理の修了者――したがって，受講生は必然的に4年生，大学院生または卒業生となる――を対象として，通年約25回の半日間の実習と夏季休暇中を利用しての館園の見学，実務実習によって行っている。以下に本年度の実習日程を列記する。

4月18日	ガイダンス		
4月25日	事前指導		
5月2日	野外博物館の特質，現状と課題	講師	後藤和民氏（千葉市教育委員会）
5月9日	千葉市加曾利貝塚博物館にて実習	講師	庄司克氏（加曾利貝塚博物館学芸員）
5月16日	地域博物館とその役割について	講師	中島利治氏（埼玉県立博物館学芸員）
5月23日	埼玉県立博物館にて実習	講師	早川智明氏（埼玉県立博物館学芸員）
5月30日	神奈川県立博物館にて実習	講師	神沢勇一氏(神奈川県立博物館学芸員)
6月6日	東京都区内の私立美術館の見学実習		
6月13日	同		
6月20日	NHK放送博物館にて実習	講師	河野光子氏(NHK放送博物館学芸員)
6月27日	国立科学博物館の見学実習	講師	国立科学博物館普及課員
7月4日	交通博物館にて実習	講師	松沢正二氏（交通博物館学芸員）
7月11日	前期博物館実習事後指導		
	夏季休暇中の博物館実習事前指導		
10月3日	夏季休暇中の実習報告と事後指導		
10月17日	海外の博物館の現状（スライド使用）		
10月24日	展示の企画から実施まで（スライド使用）	講師	佐々木朝登氏（丹青社）
11月7日	資料取扱い実習(Ⅰ)（美術作品の取扱）		
11月21日	文化財保護について	講師	三輪嘉六氏（文化庁）
11月28日	博物館資料の梱包と輸送（映画使用）	講師	長谷川正夫氏（日本通運特殊輸送部）

12月５日　資料取扱い実習(Ⅱ)（考古資料の取扱）

12月12日　図録・ポスター等の企画から製作まで

講師　中矢富雄氏（大塚巧芸社）

12月19日　保存科学について（スライド使用）講師　江本義理氏（東京国立文化財研究所）

１月16日　博物館実習の総括

１月23日　　同

以上の如く，本年の博物館実習は，前期は主として館園の実際の業務を見学・研修することに力点を置き，夏季休暇を利用して各自この深化を計るもので，後期はこうした前期，夏季休暇を通じての体験を重点的な項目毎にさらに整理して体得することを目的としている。このため，前後期を通じて，現職にある各分野の専門家にそれぞれ講師をお願いしている。

この方法は例年と大きな変化はないが，受講生の増加に伴ない，各自が体験的に実習することがますます困難になっている。現状に対して，付属博物館を含む学内施設の物理的な限界はあまりにも甚だしい。いきおい，講義，演示あるいは視聴覚機器を利用しての代理体験による実習に比重が傾きがちである。今後，学内諸施設の拡充に一層の努力が必要であると痛感する。

ところで，現在の大学における学芸員養成制度に種々の問題点があることは既にいくつかの指摘がある。とりわけこの博物館実習という課目にはその多くが集約的に表われている。もとより短期間の実習によって学芸員の職務の全般にわたって修得することは望むべくもないが，現状の実習課程と博物館における学芸員に要求されている諸業務との懸隔は甚だしいと言わざるを得ない。学芸員養成制度の根底的な見直しを行なうなかで，博物館実習の内容と在り方の再検討が必要なところに至っていると言えよう。

以下，本年度受講生の実習レポートのいくつかを紹介したい。

博物館実習（於宮崎県立総合博物館）

９月３日から８日まで宮崎県立総合博物館で実習をした。今までの見学実習に比較すると，かなり深く学ぶことができた。……

すべての分野（歴史・自然・美術の三部門構成）を一通り実習したあと痛切に感じることは，自分の専門（地理学専攻）と異なる分野では，調査研究はもちろん収集・保管・展示など，とてもやれるものではないということであった。と同時に，一つのことのプロを目指すこれからの努力に人間としての精神的充実とやりがいをも想像できた。民俗担当の先生は，研究熱心で数多くの機関誌等に論文を発表されたり，資料の収集に駆け回ったりなさっている。その先生の「博物館にいる時はもっぱら資料の手入れ，研究は自宅で毎日４時間は机に向かいま

す。」という言葉が印象的であった。ちなみに，この先生は主婦でもあるのだ。

宮崎県において，県民の博物館に対する認識度は高いとは言えない。そのために，全館あげて教育普及活動に力が注がれていた。郷土を知るための地形地質観察会・自然観察会，森の教室など，広い県内各地で活動を続けている。実習中参加した「森の教室」が終わってからの学芸員諸氏との懇談からは，こうした活動後の充実感をまざまざと味わうことができた。広い県内にたった一つの県立博物館しかないのは残念なことであるが，この活動は県民の博物館に対する意識の高揚のために最良の方法だと感じた。……

宮崎県立博物館は，展示室にしても収蔵庫にして手狭になってきていると感じられた。貴重な資料がたくさん収まっている収蔵庫には，大テーマが「郷土宮崎」であるが故に陽の目をみない資料があるかも知れない。今や宮崎県は，分野別専門館を設けなければならない時期にきているように思える。

私は実習中，分野別に細かい仕事内容をも学んだのだが，全てが初めてのことと言ってよく，大学での実習の乏しい経験では，正直とまどった。まだ専門を持ったプロとしての学芸員になる前の，ほんの序の口に立ったばかりなんだと痛切に感じた。今後一層の勉強をして，早く「学芸員」として一人前になれるよう努力したい。

宮崎県立総合博物館の皆様に末筆ながら深く感謝したい。　　（吉岡圭子）

博物館実習（於東京都大田区立博物館）

Ⅰ．「実習日誌」から

7月28・29日　館長講話・館内案内・展示説明・館の沿革の説明・管理係の仕事説明・文化財係学芸員による文化財保護などに関する説明を受ける。

早くも『現場』に驚く。

7月30日　民俗資料受付に同行。資料カード作成。

「もの」のみではなく，その「もの」に関する情報の大事さ，資料提供者らとの人間として触れ合いの大切さを考えさせられた。

7月31日　寄贈資料整理・展示説明実習。

失語症の恐怖に大汗。うまくできるならば，一番解り易い説明方法なのに……。

8月1日　都立中央図書館で資料撮影。

他の機関との連携・協力の課題に目を開かせられる。

8月2日　来館者受付・応対。

実にさまざまな質問に緊張する。

8月3日　映画会の助手。

あいにくの雨天だがたくさんの来場者がある。

8月5日　資料複写・翌日の学習会の準備。

8月6日　「おもちゃ作りの会」助手。

会が終った後の満足げな参加者にこちらも充実感を感じる。

8月7～9日　展示案の作成から展示。

郷土学習室の中での「馬込文士村」をテーマにした展示を行なう。見る側から展示する側へと回る。展示をする側にたって見る側のことを考えることができ良い経験をした。悩んだ分だけ充実感も大きい。反省会を開いていただいた。

8月10日　実習最終日。まわりの人々全てに感謝の気持で実習を終える。

以上が，約2週間の実習日程であった。最初の予定よりはるかに沢山の仕事を体験できた。大学で受動的になりすぎていた私にとっては，いかなるものにもかえられない貴重で充実した日々であった。

Ⅱ．　実習を終えて考えた事

……博物館に「建物」は欠く事ができないが，博物館の核心は建物ではない。収集や運営の計画，理念の上に設計されなくてはならないと思う。当館の場合も，展示スペース，収蔵スペースなどに問題点が指摘できる。こんな面を見ると，設計の段階から，実際の運営に則してできなかったのか，実際にそこで働く人々が設計の段階から深くかかわれなかったのかと思う。……「地方の時代」・「地域文化」といったとき，それは博物館などの機関の側だけでなく，地域住民自身の問題であるように私は思う。それに対して，人々が何かを考えたり，行動したりするうえでのきっかけ，手懸りを「地域」の博物館は与える役割ができるように思う。地域の人々に何をどう還元してゆくのかを考えるとき，博物館の運営は，いわゆる行政的であってはならないだろうと思う。

……当館は小さい博物館であるが，学芸員の方々は6名いる。全職員の半分にあたるが，大変に忙しい。小規模館であるがゆえであろうか。開館して歴史が浅いためもあろうか，管理係の職員の方々と学芸員の方々のチームワークの良さを強く感じた。全員で一つ一つ対処している感じである。研究職の人達が来館者と非常に近い距離にあることも強く印象に残った。

実習中，体験学習教室を手伝ったが，最近注目されている企画であり，私自身もつねづね参加したいと思っていたところで得る所が多かった。「時間の制限・個人差を考えると無難な課題になり易く，一方で多くの事を体得してくれる事を期待してしまう」とは，学芸員の方のお話であったが，小なさテーマからでも「参加」する事で得られる事は重みを持つし，何より五感で知った事はよく残ると思う。博物館と人の新しい関係の仕方でもあると思う。

実習の最後に展示案を作り，郷土学習室に展示を行ったが，「もの」の多さイコール展示の良

さでない事，「もの」を見せるだけではなく「もの」の意味，それに関する情報を示すのだという事を身をもって知ることができた。……

実習中お世話になった全ての館の方々に深く感謝します。　（沖野富美子）

以上，夏季休暇中に館園での実務実習を行った受講生のレポートの一部を紹介した。この夏季休暇中の実習を通じて受講生は，個人的にあるいはグループで，実際に館園での中核となる学芸員と直接に接し，学芸員の仕事に対する理解を深めるとともに，今日の博物館のかかえる多くの問題について積極的に考える姿勢を持ったことが多くのレポートからうかがえる。と同時に学芸員の専門性について，自分自身のこととして受け止め，学芸員指向を強めるものにあっては，その専門性の深化をはかりたいという意欲が認められるものが多い。

末筆ながら，前後期を通じてお世話になった講師の方々ならびに各館園関係各位に深甚の謝意を表したい。また，夏季休暇中に本課程受講生が見学・実習でお世話になった各館園の関係各位にも同様，深甚の謝意を表する次第である。